

言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 黄 宇暁
論文題目 白先勇研究
——「流浪する中国人」の民族的アイデンティティの探求——
論文審査委員 松永 正義教授、坂井 洋史教授、岩月 純一准教授

1 本論文の構成

黄宇暁氏の博士学位請求論文『白先勇研究——「流浪する中国人」の民族的アイデンティティの探求——』は、台湾の作家白先勇の文学的生涯を「民族的アイデンティティの探求」という視点からとらえ、その変遷の過程と特徴とを、「紐育客」シリーズの短編を主たる材料として分析するものである。

本論文は以下の各章から構成される。

序章 現代中国文学史における白先勇の地位

- 一 白先勇文学の意義
- 二 白先勇文学に対する評価
 - 1、台湾文学における白先勇
 - 2、大陸における白先勇評価

第1章 白先勇文学の独自性

- 一 白先勇文学の原点
 - 1、「六十年代世代」の一員としての白先勇
 - 2 白先勇の独自の疎外感
- 二 白先勇の作品と先行研究
 - 1、三つの時期
 - 2、先行研究
- 三 本稿の目的

第2章 疎外体験から「歴史主題」の誕生まで

- 一 「滄桑感」、「疎外感」と抵抗意志の形成
 - 1、二つの危機意識
 - 2、危機意識の背景
 - 3、自殺—自我喪失に対する抵抗
 - 4、期待と不安混じりの渡米
- 二 「歴史意識」の形成——「台北人」シリーズをめぐって

- 1、「歴史意識」の登場
- 2、歴史による危機の化身—尹雪艷
- 3、「歴史意識」の具体的展開
- 4、「滄桑感」と「歴史意識」

第3章「中国」主題の出現——「シカゴの死」

- 一 異国での疎外感—「中国人」という自意識の再確認
- 二 喪失感の根源
 - 1、「留学生文学」との異同
 - 2、故国から逃避する主人公
- 三 換骨脱胎の精神的遍歴
 - 1、換骨脱胎した白先勇
 - 2、台湾時代の白先勇
 - 3、他者との出会いによる自己発見

第4章 「香港——一九六〇」から見る白先勇の中国像

- 一 「紐育客」シリーズの作品としての「香港——一九六〇」
 - 1、看過された「香港——一九六〇」
 - 2、「紐育客」シリーズのモチーフ
- 二 「香港——一九六〇」における「中国」
- 三 「香港——一九六〇」における自己

第5章 中国の喪失と自己放逐の精神

- 一 「流浪する中国人」
- 二 先行研究に指摘された逆らえない力
- 三 華人社会における連帯感の崩壊
- 四 抗争意識への相反する感情
- 五 恩師夏濟安の苦闘と無念

第6章 暗闇の中での模索——「謫仙怨」

- 一 「台北人」たちの中国への反発と依存
- 二 白先勇におけるアイデンティティ・クライシス
- 三 『現代文学』にかける白先勇の思い

第7章 歴史に翻弄される中国人

- 一 「夜曲」に見られた理想と現実の隔絶
- 二 「骨灰」における白先勇の「中国」像
- 三 現実に追随しない白先勇

終章

付録1 白先勇略年表

付録2 白先勇著作目録

付録3 参考文献

2 本論文の概要

本論文の特徴は、白先勇の文学の形成過程を、白先勇の近代中国への歴史意識の変遷と、そこでのアイデンティティーの探求の過程としてとらえようとするところにある。

序章では、白先勇の文学は台湾でも大陸でも評価が高いが、しかしまた批判も多く、その評価はさまざまであることが述べられる。

第1章では、白先勇の文学を、渡米までの個人的な不安、閉塞感などを表現しようとしていた第一期、渡米後の中国近代史の中にアイデンティティーを探求しようとした第二期、七〇年代末頃からの歴史的テーマとともに同性愛などの個人的テーマをも取り上げようとした第三期、の三つの時期に分ける。第二期には「台北人」「紐育客」のふたつのシリーズがふくまれ、本論文が主要に扱うのはこの時期である。また、先行研究に触れつつ、欧陽子に代表される普遍的テーマの分析と、陳正靨に代表される歴史的テーマの分析を統合し、ふたつの主題の起伏消長の中に白先勇のアイデンティティーの流動性、多重性を見るべきだとする。

第2章では、第一期の作品の中にある孤独感、疎外感、特殊な家庭環境、病気がちな少年時代という個人的事情、同性愛的傾向などの個人的なモチーフであると同時に、六〇年代の台湾の青年に共通する世代感覚でもあると指摘し、渡米後の白先勇は、そうした疎外感、孤独感を近代中国の歴史と重ね合わせ、歴史感覚の中に明確化していこうとしたと論じる。

第3章では、「シカゴの死」を題材として、渡米後の疎外感の中で白先勇は中国の近代史という主題の中に自らのアイデンティティーを探求するという主題を見だし、またそこに見られる歴史感覚は、異文化衝突の中での中国への回帰という形をとった同時期の留学生文学と異なると論ずる。

第4章では、「香港——一九六〇」を題材として、香港の混乱と危機とを近代中国の縮図として描いたとする。そこには白先勇の個人的体験も反映されているが、同時に「失われた中華民国」を香港を通して提起しようとしたものでもある。

第5章では、「謫仙記」を題材として、白先勇文学の中に多く見られる歴史からはじき出された人たちの運命は、別の角度から見れば自己放逐の結果でもあって、その中には運命への抵抗という側面があることを指摘する。そうした矛盾したありかたはまた新中国成立後台湾あるいはアメリカに逃れた知識人たちのものでもあったことが、白先勇の恩師夏濟安についての記述を通して指摘される。

第6章では、「謫仙怨」を題材として、この作品が書かれた時期は白先勇が「台北人」シリーズを書き始めた時期と重なることを指摘し、「台北人」シリーズに見られる歴史の探究は、白先勇のアイデンティティーの危機の表現でもあったと論じる。またあわせて白先勇と『現代文学』との関わりが紹介される。

第7章は、「夜曲」「骨灰」を題材として、文化大革命終了後大陸の実情を理解するにつれ白先勇の中国認識は変更を迫られ、その中で白先勇の「中国」を巡る探求が一段落を告げたと指摘される。

3 本論文の成果と問題点

本論文は丹念に白先勇の個々の作品を読んだ成果であり、その周到さはたとえば付録の白先勇の著作目録や参考文献目録の周到さに裏打ちされるものである。

また白先勇の文学を「普遍的主題」の第一期、「歴史的主題」の第二期、両者の統合としての第三期に分かつのは妥当なものであり、またその第二期を、白先勇の近代中国に関わる歴史意識の形成過程としてとらえ、そこでの普遍的主題との関わりにも目を配ろうとする方法も、白先勇文学の分析として正攻法と言えるものだと思う。

とりわけこれまでおおむね歴史の中での個人の悲劇として語られることの多かった白先勇の文学について、そのなかでの歴史意識の形成過程に注目して分析し、一定の成果を収めたことは、本論文の功績と考えられる。本論文では示唆されるにとどまるが、第三期の『孽子』を「普遍的主題」と「歴史的主題」との統合として位置づけるのは、第二期を近代中国に関わる歴史意識の形成とそこからの離脱と考えることによって可能になるものと思われる。

またこれまで副次的に取り上げられるにとどまっていた「紐育客」シリーズを一貫する主題の元に取り上げたのも、本論文の特徴であり、功績であるといえよう。

本論文ではまた以上のテーマの副産物として、六〇年代世代の問題、白先勇と夏済安や陳若曦との関わり、七〇年代以後の白先勇の大陸観、とりわけ文化大革命観の問題など、興味深い指摘も多く見られる。

しかしながら本論文は、取り上げる題材をほぼ第二期の「紐育客」シリーズに限ったことから、白先勇自身についてもその第三期との関係が示唆されるにとどまり、また第二期についても「台北人」シリーズという歴史意識の表現そのものの分析を欠いているため、白先勇の全体像と言いつても難しいところは惜しまれる。

また冷戦＝内戦構造の中での中台関係から、冷戦終結後の中台関係への変化、台湾、大陸双方での歴史的变化とそこでの歴史像の変化、といった歴史的な脈の中に位置づける記述があまりなされていないことも、本論文の位置をやや不明確にしているように思われる。

さらに留学生文学との比較はなされているが、劉大任、陳若曦、王文興など、同時期の作家たちとの比較の視点があまり見られないのも、白先勇の独自性を考える上ではマイナスであったと思われる。

また作品の分析において白先勇の視点につきすぎていて、分析に深みを欠く部分が見られることも、残念な点である。

以上の点は今後の黄氏の努力に期待したい点である。

以上のことから審査委員一同は、本論文が独創性に富むすぐれた論文であると認め、一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えている。

最終試験結果要旨

2006年11月8日

受験者 黄宇暁

最終試験委員 松永正義 坂井洋史 岩月純一

2006年11月8日、学位請求論文提出者李尚霖氏の論文及び関連分野について、本学学位規定第8条第1項に定めるところの最終試験を実施した。

試験においては、提出論文『白先勇研究——「流浪する中国人」の民族的アイデンティティの探求——』に関する問題点及び関連分野について質疑を行い、説明を求めたのに対して、黄宇暁氏は適切な説明を以て応えた。

よって審査委員一同は、黄宇暁氏が学位を授与されるに必要な研究業績及び学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。